

「ツバメさん」と王子は言いました。「わたくしが命じたとおりにしておくれ」そこでツバメは王子のもうかた方の目を取り出して、下へ飛んでいきました。ツバメはマッチ売りの少女のところまでさっとおりて、ほう石を手の中にすべりこませました。「とってもきれいなガラス玉」その少女は言いました。そして笑いながら走って家に帰りました。それからツバメは王子のところにもどりました。

「あなたはもう何も見えなくなりました」とツバメは言いました。「だから、ずっとあなたと一しょにいることにします」「いや、小さなツバメさん」とかわいそうな王子は言いました。「あなたはエジプトに行かなくちゃいけない」「ぼくはずっとあなたと一しょにいます」ツバメは言いました。そして王子の足元でねむりました。次の日一日、ツバメは王子のかたに止まり、めずらしい土地で見て

きたたくさんの話をしました。ナイル川の岸
ぞいに長い列をなして立っていて、くちばし
で金の魚をつかまえる赤イトキの話。世界と
同じくらい古くからあり、さばくの中に住ん
でいて、何でも知っているスフィンクスの話
こはくのロザリオを手にして、ラクダのかた
わらをゆっくり歩くぼうえき商人の話。黒い